九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

劉辰翁の評点活動と元朝初期の文学

奥野, 新太郎
九州大学大学院人文科学府博士後期課程

https://doi.org/10.15017/12839

出版情報：中国文学論集. 37, pp.76-90, 2008-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

劉辰翁の評点活動と元朝初期の文学

奥野新太郎

劉辰翁（一二三二―一二九七）、字は会孟、号は須渓、江西[1]の廬陵（今の江西省吉安市）の人である。彼は中国文学史においては、南宋末期の辛棄疾派に連なる愛国詞人[2]、或いは宋末の評点家[3]としてその名が知られている。だが彼の文学活動を代表する評点は、実際には一二七五年、南宋滅亡とほぼ時を同じくして本格的に開始された。劉辰翁の文学活動は、宋代よりも元代の文学において、より重要な意味を持つものだったのである。従来の文学史における宋末の文人という位置付けに加えて、元代文学の礎を築いた文人の一人として、劉辰翁は改めて評価されなければならない。本稿は、従来文学研究の対象となること自体が少なく、また元代文学との関連において論じられることも少なかった劉辰翁について、特に元初の活動[4]に着目し、元代文学におけるその意義を検証しようとするものである。

一　宋の滅亡と劉辰翁

まず劉辰翁の伝記及び宋末元初の動向について確認する[5]。彼は南宋理宗紹定五年（一二三二）に生まれた。十歳で江万里の設立した白鷺洲書院に学び、欧陽守道に師事した[6]。同門には文天祥がいる。景定三年（一二六二）に進士及第。その際、対策で宰相賈似道を批判したが、理宗自ら丙第に置いた。その後、母親の老齢を理由に、故郷に近い贛州（今の江西省贛州市）の濂渓書院の山長（塾長）を請う。太学生時代に、当時国子祭酒であった江万里に才能を認められ、以後彼には度々推挙され職を斡旋されるが、いずれも長くは続かなかった。臨安府学で教授を勤めた

ことがあり、その時の教え子に戴表元がいる。[7] 至元十一年（一二七四）、クビライは阿朮（アジュ）と阿里海牙（エリク・カヤ）の進言により、伯顔（バヤン）を将軍として南宋領へと攻め込む。翌十二年、江西にも元軍が攻め入る。二月、江万里は自宅の「止水」（池の名）に身を投げ自殺し、文天祥は詔に応じて勤王軍を起こす。十一月、省治隆興府が落ち、江西諸郡は降伏する。翌十三年正月、恭帝は伝国の玉璽を元に献上し、ここに南宋は滅亡する。時に劉辰翁四十五歳であった。彼は至元十二年十二月に廬山の虎渓に避難し、妻の蕭氏の一族の保護を受けていた。[8] 南宋滅亡後の劉辰翁の動向については、「元には仕えず」の一言で片付けられることが多い。確かに彼がこれより後、主に故郷にて閑居していたことは事実だが、決して寞々と隠遁していた訳ではない。元末の危素「元故徴君杜公伯原父墓碑」（『危太樸文続集』[9] 巻二）には次のように見える。

時臨江皮氏[10]尊賢禮士。若廬陵劉太博會孟・鄧禮部巾父（ママ）・蜀郡虞公及之、豫章熊僉判與可、及我吳文正公皆在焉。公與同里范供奉德機、年最少、從諸公講學不倦、及壯超然有遺世之意。

時に臨江の皮氏 賢を尊び士を礼す。若ば廬陵の劉太博会孟・鄧礼部巾父（刻、字中甫）・蜀郡の虞公（集）之れに及び、豫章の熊僉判与可（朋来）、及び我が呉文正公（澄）皆焉に在り。公（杜本）と同里の范供奉徳機（椁）と、年最も少く、諸公に従ひ講学して倦まず、壮に及んで超然として遺世の意有り。

これは『谷音』の編者である杜本（字は伯原、一二七六―一三五〇）の墓碑銘であるが、ここには臨江の皮氏のもと、劉辰翁・鄧剡・虞集・熊朋来・呉澄・范椁、そして杜本ら江西の文人達が一堂に会していたことが記されている。杜本の生年から、右の状況が元初のものであることは疑いない。なお虞集と范椁は元詩四大家として当時活躍した文人であり、この墓碑銘は従来報告されていない劉辰翁と四大家との直接の交流を示すものとして注目すべき資料である。また劉辰翁は、南宋滅亡後も地域の学校や寺社の記念碑、そして墓碑などに多くの文章を著しており、時には路外からも依頼され、仕官こそせぬものの、[11] 在野の名士としての地位や名声は元代においても相当高かったようである。僧侶や道士達とも親交し、よく文章を依頼された。さらには劉詵のように自作の詩を携えて劉辰翁に面会を求めて来る若者もおり、[12] 劉辰翁に文学を認められることは当時の江西の文人にとって一つの名誉であった。そして劉辰翁の評点は宋の滅亡とともに始められた。息子の劉将孫「刻長吉詩序」（『養吾斎集』巻九）は言う。

劉辰翁の評点活動と元朝初期の文学

先君子須溪先生、於評諸家詩、最先長吉。蓋乙亥辟地山中、無以紓思寄懐、始有意留眼目、開後來、自長吉而後、及於諸家[13]。尚恨書本白地狭、旁注不盡意、開示其微、使覧者隅反神悟、不能細論也。自是傳本四出、近年乃無不知讀長吉詩、效昌谷體。

先君子須溪先生、諸家の詩を評するに於て、最も長吉（李賀）を先にす。蓋し乙亥（一二七五）に地を山中に辟けしとき、以て思を紓べ懐を寄する無く、始めて意有りて眼目を留め、後来を開かんとし、長吉より後、諸家に及べり。尚ほ恨むらくは書本の白地狭く、旁注は意を尽くさざれば、其の微を開示し、覧る者をして隅反神悟せしむるのみにして、細論する能はず。是れより伝本四もに出で、近年は乃ち長吉詩を読み、昌谷体に効ふを知らざるは無し。

この文に見える、彼の評点が南宋滅亡という政治的激動の最中に行なわれたという事実は注意せねばならない。何故なら後述するように、彼の活動の動機には、南宋の滅亡がその根本部分において深く関わっていたからである。

さて、劉辰翁の評点は、杜甫や李賀のように別集として現在まで残るものの他、『唐詩品彙』などに引用されて部分的に現存しているものがある[14]。例えば蘇軾の詩への評点は『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』として伝存しているが、もともと福建で作られたこの本が、江西で増刊校正本として出版された際には劉辰翁評点が付されるという現象は、江西の書物と劉辰翁の結び付きの強さを示すものと考えることができる（実際、彼の著作は多く江西人の手で出版される）。さらに加えて、劉辰翁が評点或いは校訂をした書物として次のようなものが挙げられる。

『班馬異同』　『越絶書』　『陰符経』　『老子道徳経』　『列子冲虚真経』　『荘子南華真経』
『世説新語』　『陶淵明集』[15]　『唐百家詩選』[16]　『興観集』　『古今詩統』

このうち、『興観集』と『古今詩統』は劉辰翁が編纂した選集である。『老子』『列子』『荘子』は南宋の林希逸（一一九三―？）の口義本を用い、劉辰翁の「丹鉛筆端」を経ている（『劉須溪評点九種書』凡例）。本文と林注それぞれに批評が加えられ、本文はまま改められる。このことは、劉辰翁の評点には校訂という作業も付随していたことを示唆する。そうなると、劉辰翁による唐宋の詩の評点本も、劉辰翁の意によるテキストの改変が行われた可能性がある[17]。これは元代における古典の受容にも大きく関わる問題であろう。何故なら、当時は劉辰翁の手を経た典籍が多

数存在し、それらが、次の時代の文学・学術を担う若者達の教材となっていたと考えられるからである。

二　劉辰翁による評点の目的とその実際

評点とは、作品に対する批評と作品の本文に付された圏点を併せたものである。その起源については諸説あるが、批評と圏点を備えた一般的な評点のかたちが定着するのを南宋とする点では諸家の見解は一致する。先に見たように、韻文散文を問わず様々な作品や書物に評点を施した劉辰翁であるが、その中心が詩の評点にあったことは疑いない。劉辰翁以前の評点家として著名な者に呂祖謙・真徳秀・謝枋得らがいるが、彼らのものは全て自選の古文選集に対する評点であり、散文に対するものであった。この点からも、詩に重点的に評点を施した劉辰翁は画期的な存在であった。そして、劉将孫の「先君子須溪先生於詩喜荊公、嘗點評李注本刪其繁、以付門生兒子[18]（先君子須溪先生　詩に於て荊公を喜び、嘗て李注本を点評して其の繁を刪り、以て門生児子に付す）」という言葉からもわかるように、劉辰翁の評点の目的はまず何よりも後進の教育にあった。劉辰翁の評点本の多くは彼の私塾で使用される教科書であったとされる[19]。周知のごとく元朝初期は科挙が停止されていたが、それとは無関係に当時は作詩熱が盛んであった[20]。おそらく、科挙に合格する為のものに成り下がった宋末の文学や、文学を軽んずる道学への反動にかかる現象であったであろう。元代の著名な文人の伝記には宋末の衰えた文風を建て直したことがしばしば記される。そして劉辰翁の評点もそれらと決して無縁ではない。彼もやはり宋末の文学を建て直そうとしていた。例えば劉辰翁は言う。「私は古今の文学作品の秘められた深意を簡潔な評点の中に明らかにしたが、他人はそれを理解しないばかりか、却って私を嘲笑するばかりだ[21]」と。これは自身の評点に対する劉辰翁の自負であるとともに、劉辰翁の評点を理解せぬ者達に対する不満の表白でもある。評点を通した劉辰翁の教育とは、自己の信じる正しい文学を若者達に伝えようとするものであった。そしてそれは、科挙合格の為の小手先の文学ではなく、純粋なる感情の発露を何よりも重んじる文学であった。また劉将孫「送彭元鼎采詩序」（『養吾斎集』巻九）には次のように言う。

近年不獨詩盛、采詩者亦項背相望、寧非世道之復古而斯文之興運哉。……吾嘗嘆、夫子既刪之後、「離騒」未

作以前、寧無一言之幾於道、而曠數百年不見稱於世。是雖一技、豈不亦有時命哉。昔吾先君子須溪先生、毎哀江南百年文獻之零落、欲以詩存其爲人。蓋采詩者之行四方、以此。

近年独り詩の盛んなるのみならず、詩を采する者も亦た項背相ひ望みたるは、寧ぞ世道の復古にして斯文の興運に非ざらんや。……吾嘗て嘆ず、夫子の既に刪りたる後、「離騒」の未だ作られざる以前、寧ぞ一言の道に幾きもの無からんや、而れども数百年を曠しくして世に見称されず。是れ一技たりと雖も、豈に亦た時命有らざらんや、と。昔　吾が先君子須渓先生、毎に江南百年の文献の零落を哀しみ、詩を以て其の人と為りを存さんと欲す。蓋し采詩の四方に行はるるも、此れを以てするならん。

これに拠れば、かつて劉辰翁は江南の文献が失われることを嘆き、[22]古今の詩人達の作品を保存しようとしていたと言う。これは采詩（選集の編纂）に対する劉辰翁の考えであると同時に、彼の活動の根本的な動機に関わるものでもあると考えられる。南宋の滅亡とともに評点活動を本格的に開始した劉辰翁は、自分たちの文学を積極的に次の世代へと伝えようとしていた。先に述べた後進の教育という劉辰翁の目的は、文学の伝承という、より大きな視点で捉えられるべきものと筆者は考えるのである。

では、実際の劉辰翁の評点はどのようなものであったのか。ここでは李賀の詩を例として見ていく。次に挙げるのは李賀の「大堤曲」である（以下、詩の傍点は劉辰翁による圏点）。

妾家住**橫**塘、紅紗滿桂香。**青雲教**綰頭上髻、明月與作耳邊璫。蓮風起、江畔春。大堤上、留北人。**郎**食鯉魚尾、妾食猩猩脣。莫指襄陽道、**綠**浦歸帆少。今日菖蒲花、明朝楓樹老。（『唐李長吉歌詩』[23]巻一）

この詩は、去ろうとする客の男性を何とか引き留めようとする遊女について、遊女の口ぶりさながらに活き活きと歌い上げた作品である。二句目及び尾聯に劉辰翁による圏点が付されている。二句目「紅紗滿桂香」は、「紅紗」と「桂香」とによって読者の視覚と嗅覚に訴えかけ、詩の舞台を読者の脳裏に強い実感を伴って描き出している。また、月に生えるという伝説を持つ「桂」は、四句目の「明月」と相俟って、詩中に幻想的な雰囲気をさえ醸し出す。この巧みな句作りを劉辰翁は評価し、圏点を付したのだろう。そして尾聯である。「今日はきれいな菖蒲の花だけれども、明日には老いた楓の木のようになってしまう」というこの遊女の台詞に、何故彼は圏点を付したのか。

この聯について、劉辰翁は次のごとく評を加える。

甚言時景之不留。而有願見之思、有微憾之意。

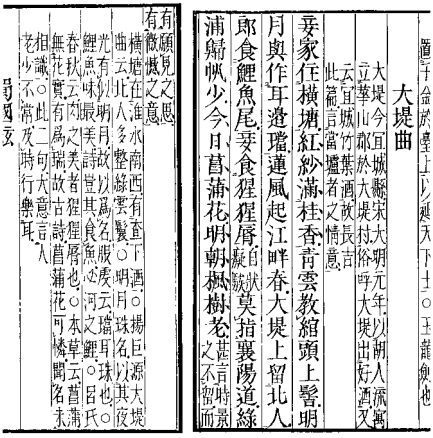
時景の留まらざるを甚言す。而れども見ゆるを願ふの思ひ有り、微かに憾むの意有り。

この聯は表面的に見れば確かに「時景之不留」を言うものに違いないであろう。だが劉辰翁はそこに、主人公の女性の、相手の男性に恋い焦がれる感情、男性が去ってゆくのを寂しく思う感情を読み取っている。これこそが劉辰翁の評点のもっとも眼目となる点である。このことは同聯への呉正子注と較べることでより浮き彫りになる。

此二句、大意言人老少不常、及時行樂耳。

此の二句、大意は人の老少は常ならざれば、時に及びて行楽すべしと言ふのみ。

「人間はいつ死ぬかわからないのだから、楽しめる時に楽しまなければ」と呉正子は言う。呉正子のこの解釈は、劉辰翁の言う「時景之不留」と同様のものである。だが呉正子はそこで解釈を終えており、主人公たる遊女の心情は見えていない。ここに劉辰翁との決定的な違いがある。呉正子が表面的な解釈にとどまるのに対し、劉辰翁は詩句に込められた主人公の心情を深く読み取るのである。この二句は、呉正子が敢えて注釈を付けながらも表面的な解釈で終わってしまっていることから、当時の一般の読者においても呉正子と同様の解釈で読まれた可能性は高いと考えられる。しかしそれではこの詩の深意を充分に味わうことはできない。劉辰翁がこの聯に特に圏点を付し、また自分の解釈を評語として書き入れた理由はまさにここにあったと筆者は考える。圏点によって読者の注意を最後の二句に引きつけた後、「有願見之思、有微憾之意」という短い評語



官板『唐李長吉歌詩』（九州大学蔵）

詩の本文中の双行の評語及び本文への圏点が劉辰翁による評点であり、詩題及び本文後の字下げの双行注が呉正子注である。

を加えることによって、劉辰翁は、この詩をより味わい深い作品として、読者の前に提示したのである。これが劉辰翁の評点であった。

では次に「老夫採玉歌」（『唐李長吉歌詩』巻二）を見てみよう。

採玉採玉須水碧、琢作步搖徒好色。老夫飢寒龍爲愁、藍溪水氣無清白。夜雨崗頭食蓁子、杜鵑口血老夫淚。藍溪之水猒生人、身死千年恨溪水。[24]斜山栢風雨如嘯、泉脚挂繩青裊裊。村寒白屋念嬌嬰、古臺石磴懸腸草。

第一句目以外の全ての句に圏点が付されている。冷たい川で玉を採る老人。苦労して採取した玉も、貴人の好色の道具になるだけ。それにも拘わらず老人は玉を採る。もはや澄んだ清らかさを失った川の中、玉を採る老人を襲う飢えや寒さは、川に住む竜ですら哀れむほどの酷さである。夜の雨の中、蓁子（はしばみ）をぼそぼそと食べながら、老人は泣く。辛い労働の中で死んでいった者達の怨みがいつまでも消えないこの藍田の川。吹き荒れる風雨、老人と岸を繋ぐ命綱は頼りなく水流に漂う。村の貧しい小屋に残してきた幼子の姿を思い出す老人の目に映るのは、苦しみと悲しみでずたずたになった己の腸を象ったかのような懸腸草であった。この詩は、歌い起こしの一句目を除き、全篇を通して、労役を強いられた老人の苦しみと悲しみを詠い上げたものであり、故に劉辰翁は起句以外の全ての句に圏点を付したと考えられる。作品中の特に優れた部分や重要な箇所に付すのが圏点であるが、このように作品全体に対して圏点を付ける例が、劉辰翁にはしばしばある。それは、劉辰翁がその作品を極めて高く評価していることを意味するものである。さて、この「老夫採玉歌」に対する評語には次のようにある。

謂長繩懸身下採溪水。其索意之苦、至思念其子、豈特食蓁而已。又云、「腸草」不必草名、斷腸之類。以其念子視此懸磴之草、如斷腸然、苦甚。

長縄もて身を懸けて下りて渓水に採るを謂ふ。其れ意を索めたるところの苦しみや、至（はなは）だ其の子を思念すれば、豈に特（ただ）だ蓁を食（くら）ふのみならんや。又云ふ、「腸草」は必ずしも草名にあらず、断腸の類ならん。其の子を念ずるを以て此の磴に懸かりたる草を視れば、断たれし腸の如く然り、苦しみは甚だしきなり。

ここでは十二句目の「懸腸草」[25]についての解釈に特に注目したい。呉正子の解釈と比べてみよう。

此篇、乃老夫不堪採玉之勞、受役於上、而不得免。故辭多怨苦。……「念嬌嬰」、謂役於採玉、雖有孩提、□

□□[26]徒念之而已。見石臺古磴之草、使人腸斷如腸之懸也。

此の篇は、乃ち老夫の採玉の労に堪へざるも、役を上より受けたれば、而して免がるるを得ざるなり。故に辞に怨苦多し。……「嬌嬰を念ふ」とは、採玉に役すれば、孩提有りと雖も、□□□徒だ之れを念ふのみを謂ふ。石台の古磴の草を見れば、人をして腸断せしむるは腸の懸かるが如くなればなり。

過酷な労働の苦しみと、幼子を思う悲しみのあまり、石段の草がまるで引き裂かれた己の腸のように見えるのだと説く劉辰翁に対し、呉正子は、腸が懸かっているような様子が見る人を断腸させるのだと説明する。両者の解釈は一見似ているが、説明の順序が逆であることがわかるだろう。劉辰翁の解釈は、老夫の苦しみや悲しみといった感情がまず根本にあり、そこから詩の世界を読み解こうとしているのである。

元詩は宋詩への反省から、唐詩の叙情性へと回帰し、理よりも情を重んじることを特徴とする。詩に込められた感情を重視し、読み解く劉辰翁の評点は、まさに元代の文学思想の先駆けとなるものであった。そして、彼の評点が元代において賞賛された所以もまさにここにあった。例えば呉澄は「於諸家詩、融液貫徹、評論造極[27]（諸家の詩に於て、融液貫徹し、評論は極みに造る）」と言い、劉辰翁が諸家の詩を読む際に、作者の心に己の心を重ねようとする態度を賞賛した。また揭傒斯は、劉辰翁の評点を「数百年に一人の才能」と絶賛し、欧陽脩とともに劉辰翁の文学も是非学ぶようにと廬陵の若者に熱心に勧めている。さらに、劉辰翁の出現によって江西の詩は一変したが、やがて元朝によって科挙が再開されると、人々はまた科挙の為の文学ばかりを学ぶようになったと揭傒斯は嘆いている[28]。このことは、劉辰翁の評点が決して科挙合格の為だけのものではなく、文学そのものの高みを追求しようとするものであったことを物語る。そしてそのような劉辰翁の評点は、元朝初期の若者達に広く学ばれた。このように、劉辰翁は宋末の文学を建て直し、次なる元代文学の礎を築いた文人であったのである。

三　江西の文学風土

ここで、劉辰翁が主に活動した江西という風土について考えてみたい。江西は彼の故郷であるだけでなく、宋元

の文学・学術において極めて重要な場所でもあった。北宋の欧陽脩以来、王安石・黄庭堅・陸九淵・周必大・楊万里など名だたる文人達が江西から輩出している。元代においても、クビライの側近として活躍した程鉅夫や、延祐の復科に際して重要な役割を果たした熊朋来、元一代を代表する巨儒呉澄の他、虞集・范梈・揭傒斯など、元代文学を担う人材を多く供給したのが江西であった。また『元史』巻一九〇熊朋来伝には次のように言う。

會朝廷遣治書侍御史王構銓外選于江西、於是參政徐琰・李世安、列薦朋來爲閩海提擧儒學官、使者報聞、而朝廷以東南儒學之士唯福建・廬陵最盛、特起朋來連爲兩郡教授。

会に朝廷 治書侍御史王構をして外選を江西に銓ばしむるに、是に於て参政徐琰・李世安、朋来を列薦して閩海提挙儒学官と為し、使者報聞して、朝廷 東南の儒学の士の唯だ福建・廬陵のみ最も盛んなるを以て、特に朋来を起こして連ねて両郡の教授と為す。

この「東南」とは江南全体を指す。江南全土における福建・廬陵の学問の評判は、まさに遠く大都の朝廷にまで届いていたのである。また元代は書院教育が盛んなことでも知られるが、書院の数においても江西は群を抜いていた。さらに、ここで福建と並べられていることからもわかるように、江西は出版業の盛んな土地でもあった。例えば、完成した『遼史』『金史』『宋史』を政府の命令により江浙行省とともに出版した[29]ことはよく知られている。劉辰翁の評点本が家族や門人達によって次々と出版され、それらの一部は朝鮮や日本へまでも伝わったことも、この江西の出版業に支えられた部分が大きいであろう。そしてこの江西において、劉辰翁はまさに当地を代表する文人だったのである。元・欧陽玄「羅舜美詩序」（『圭斎文集』巻八）に言う。

江西詩、在宋東都時、宗黄太史、號江西詩派、然不皆江西人也。南渡後、楊廷秀好爲新體詩、學者亦宗之。雖楊宗少於黄、然詩亦小變。宋末、須溪劉會孟出於廬陵。適科目廢、士子專意學詩。會孟點校諸家甚精、而自作多奇崛、衆翕然宗之、於是詩又一變矣。

江西の詩、宋の東都の時に在りては、黄太史（庭堅）を宗とし、江西詩派と号す、然れども皆江西の人にはあらず。南渡の後、楊廷秀（万里）新体の詩を為るを好み、学ぶ者 亦た之れを宗とす。楊宗は黄より少しと雖も、然れども詩は亦た小変す。宋末、須渓劉会孟 廬陵より出づ。適に科目廃され、士子 意を詩を学ぶに

専らにす。会孟 諸家を点校すること甚だ精しく、自作も多く奇崛なれば、衆 翕然として之れを宗とし、是に於て詩は又一変す。

ここでは北宋以来の江西の詩の歴史において特筆すべき人物として、欧陽玄は黄庭堅・楊万里に続いて劉辰翁の名を挙げている。欧陽玄は翰林学士承旨（従一品）にまでのぼりつめた文人で、『経世大典』の編纂の他、『遼史』『金史』『宋史』の編纂においても総裁官として中心的役割を果たし、元代中期において大いに活躍した。また、欧陽脩を祖とし、江西の文人達とも親交があった。彼の言葉は充分に傾聴に値するものと言えよう。劉辰翁は自身の文学作品もさることながら、古今の文人の作品への大量の評点によって、当時の江西の文学を「一変」させたのである。このように、劉辰翁は江西の文学を語る上で欠くべからざる重要人物であった[30]。そして、活動の場が江西であったが故に、劉辰翁は元代文学全体においてもまた枢要な役割を果たすことになるのである。

四　元代文学における劉辰翁の重要性

劉辰翁は、正史たる『宋史』『元史』には、伝はおろかその名前すら見えない。だが本稿で述べたように、彼は元代文学の基幹を構成する重要な文人であった。劉辰翁の評点の出現は、まさに宋末の文学を一変させ、次なる元代の文学を切り開いたのである。文学史においても、劉辰翁の文学は、宋代末期の文人というよりも、元代文学の先駆けに位置する文人として新たに捉え直されなければならないであろう。従来の中国文学研究においてあまり注目されなかった劉辰翁であるが、本稿で述べたように、彼の文学、とりわけその評点の中国文学史における意義は非常に大きなものであったと言わねばならない。特に、彼の故郷であり、宋元代の文学・学術の中心地の一つとして多くの人材を輩出した江西は、劉辰翁の出現によって、宋代の文学から新たな元代の文学へと変容する大きなきっかけを得た。そして江西のみにとどまらず、劉辰翁が評点を施した書物が出版されて様々な場所へと伝わることで、彼の影響は中国本土はおろか、同時代の日本や朝鮮へも及ぶことになるのである。

注

（1）本稿では元代の江西行省（現在の江西省と広東省を併せた地域）を指す。

（2）例えば前野直彬編『中国文学史』（東京大学出版会、一九七五年）には「十三世紀にはいると蒙古帝国（元）が興隆し、……やがて元軍は揚子江を越え、南宋の領土へ侵入してきた。この民族の危機に対して、劉辰翁・文天祥ら、少数の慨世哀時の志を詞に託した人々を除いて、多くの文人詞人はごく消極的な反応を示すのみで、ひたすら風流韻事にふけりつつ、祖国の滅亡を迎えた」（一六八頁）と見える。また村上哲見『宋詞研究　南宋篇』（創文社、二〇〇六年）にも「辛棄疾らの詞風を受け継ぐ詞人として、ほぼ一世代遅れて南宋後期の劉克荘、更に遅れて宋末から元代に入って遺民として生きた劉辰翁がいる」とある（二五頁）。近年編まれた呉海・曾子魯主編『江西文学史』（江西人民出版社、二〇〇五年）においても、文天祥らとともに宋末の愛国詞人として描かれており、評点を通した元代文学への影響という視点からは論じられていない。

（3）評点に関する研究として、高津孝「宋元評点考」（『鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集』三一号、一九九〇年。のち潘世聖等訳『日本宋学研究六人集　科挙与詩芸――宋代文学与士人社会』〔上海古籍出版社、二〇〇五年〕に中国語訳を収録）、張伯偉著・齋藤希史訳「評点遡源」（京都大学『中国文学報』第六三冊、二〇〇一年十月。のち章培恒・王靖宇主編『中国文学評点研究論集』〔上海古籍出版社、二〇〇二年〕に中国語にて再録）、孫琴安『中国評点文学史』（上海社会科学院出版社、一九九九年）などがある。また顧易生・蒋凡・劉明金『宋金元文学批評史』（上海古籍出版社、一九九六年）には劉辰翁の評点について比較的詳細な考察がある。

（4）具体的には一二七五年から一二九七年（劉辰翁の没年）までの活動を指す。

（5）劉辰翁の伝記の主な資料には、楊慎『楊升庵集』・銭士昇『南宋書』巻六三・黄宗羲『宋元学案』巻八八巽斎学案・万斯同『宋季忠義録』巻十六・陸心源『宋史翼』巻三五・柯劭忞『新元史』巻二三七がある。その他、馬群「劉辰翁事跡考」（『詞学』第一輯、華東師範大学出版社、一九八一年）、呉企明「劉辰翁年譜簡編」（同氏校注『須渓詞』所収、上海古籍出版社、一九九八年）も参照した。

（6）劉辰翁の経歴について、清・顧嗣立『元詩選』などが陸象山の門下とするのは誤りである。『元詩選』三集の劉辰

翁小伝に「年十七登陸象山之門、年二十四補太學生」とある。これは呉澄『呉文正公集』（『元人文集珍本叢刊』三・四、新文豊出版、一九八五年）巻十三「金谿劉太博文集序」に「年十七而登陸子之門、二十四而入學」とあるのに基づくと考えられるが、この「劉太博」は劉辰翁とは別人である。

（7）戴表元は、その弟子袁桷とともに元代において名声を博した文人である。彼は慶元路奉化州（今の浙江省奉化市）の出身だが、劉辰翁に学んだ縁で、廬陵出身の文人達とも盛んに交流をしていた（戴表元『剡源戴先生文集』【四部叢刊初編】巻十四「送曹士弘序」）。劉辰翁の知名度と影響力を窺わせるエピソードである。

（8）劉辰翁『須渓集』巻三「虎渓連社堂記」に「（徳祐）元年（一二七五）冬十二月、予避地虎渓、主蕭氏、諸君辛哀我、館且穀我」とある。なお本稿で引用する劉辰翁の詩文は文淵閣四庫全書本『須渓集』十巻を底本とし、適宜諸本を参照した。彼には文集一百巻があったが明代に散佚し、現在行なわれているのは清人が『永楽大典』などから集めたものである。その他、句題詩を集めた『須渓先生四景詩集』四巻、記を集めた『須渓先生記鈔』八巻などもある。近年では段大林校点『劉辰翁集』十五巻（江西人民出版社、一九八七年）、前掲呉企明校注『須渓詞』三巻がある。

（9）『元人文集珍本叢刊』七所収。

（10）この「皮氏」はおそらく皮澄（或いはその一族）であると考えられる。皮澄並びに彼の一族は呉澄と親交が深く、呉澄が彼らのために著した詩文が彼の文集中に多く見える。それらに拠れば、皮氏の館は当時、江西において文人達が集まるサロンのような役割を持っていたようである。呉澄『呉文正公集』巻十五「送法易子序」、同書巻三一「題胡志甫墓誌後」などを参照。

（11）元代は、儒者は儒戸という身分に分けられ、免税・免役などの優遇を受けていた。『元史』世祖本紀にも「（至元十三年【一二七六】三月）戊寅、敕諸路儒戸通文學者三千八百九十、並免其徭役」（巻九）と見え、儒者は国家に保護されていた。大島立子「元代の儒戸について」（『中嶋敏先生古稀記念論集』開朋会、一九八〇年）などを参照。同氏に拠れば、儒戸は一度「付籍されても、その資格を有しない者であれば原則としては、その特権が認められなく」なり、故に「常に文学、経学の習得に力を注いでいなければならなかった」という。元人が科挙の停止にも拘わらず詩文の学習に励んだのは、こうした現実的な理由によるところもあったであろう。

（12）危素『危太樸文続集』巻五「劉桂翁先生墓志銘」に「（劉詵）爲詩、以謁太學博士劉公辰翁、劉公稱之」と。

（13）『韋江州集』（四部叢刊初編）附録所収劉辰翁評語に「德祐初初秋、看二集（韋応物と孟浩然の詩集）、謹用校點并記之」と見え、韋応物・孟浩然の詩集への評点もこの時期になされている。

（14）劉辰翁が評点を施した詩人のうち、現在確認できるものは以下のようである（◎は別集が現存するもの）。

（唐）駱賓王　杜審言　賀知章　陳子昂　張九齡　王之渙　孟浩然◎　高適　王維◎　李白　儲光羲　王縉　常建　崔顥　錢起　杜甫◎　岑參　孟雲卿　戴叔倫　韋応物◎　裴迪　張謂　沈千運　盧象　盧綸　郎士元　司空曙　武元衡　孟郊◎　劉長卿　劉商　王建　韓愈　柳宗元　賈島　金昌緒　盧仝　李賀◎　姚合　崔塗

（宋）王安石◎　蘇軾◎　陳与義◎　陸游◎　汪元量◎

（15）李朝中宗十七年（一五二二）刊『陶淵明集』の朴**祥**跋文に「右靖節先生詩文集、康州須溪本、不但文集之不具而其所載且有闕失、是豈陶氏之全書耶」とある（藤本幸夫『日本現存朝鮮本研究　集部』［二〇〇六年、京都大学学術出版会］八四三頁に拠る）。この跋文からは劉辰翁本が選集であった可能性も窺える。

（16）『永楽大典』巻九〇七に『唐百家詩選』への劉将孫の序文が引用されており（劉将孫『養吾斎集』には未収）、そこに「此本經先子論訂提掇、特欲以啓後學亹亹之機。古雲譚見心、詩稱能品、先子深賞愛之。已而名士、刻雅南者多選其作。取吾家荊公選詩本刻之、寄聲爲序。先君子須溪先生點校熟復、疑荊公別有選者、然唐詩浩繁雜襲、得此本讀之者、亦勝如盡讀諸集也。……予懼夫覽者徒能疑於是編、乃上下論之、非日辯其不然、聊以廣或者之意。雖不必如荊公所謂『觀此而足』、抑以此選此評而觀唐詩不亦可哉」とある。譚見心は劉辰翁の門人譚復である。序文に言う「此評」とは劉辰翁の評点を指すと考えられるが、時少章による評点の可能性もある。時少章は劉辰翁より三、四十歳年長で、『唐百家詩選』に評点を施した。その評点本は現存しないが、評の一部が呉師道『呉礼部詩話』に引用される。時少章については査屏球著・坂井多穂子訳「王荊公『唐百家詩選』の宋における伝播と受容――時少章『唐百家詩選』評点の詩学的淵源について――」（宋代詩文研究会『橄欖』第十三号、二〇〇五年）を参照。だが少なくとも劉辰翁が校訂した『唐百家詩選』が、劉辰翁の没後に門人の譚復によって出版されたことは間違いない。

（17）事実、王安石の詩集（『王荊文公詩箋註』）は劉辰翁の刪定を経ている。

（18）影印元大徳五年王常刻本『王荊文公詩箋註』（『北京図書館古籍珍本叢刊』八七、書目文献出版社、一九八八年）劉将孫序文。王常は劉辰翁の門人である。

（19）高津氏前掲論文。

（20）詩の流行を、亡き宋朝を偲ぶナショナリズムであると捉える向きもあるが、逆に科挙という縛りが無くなった元代だからこそ、詩を純粋に文学として追求することが可能になったとも言えよう。有名な月泉吟社の活動にしてもやはり科挙を偲んでのものと解されることが多いが、宋末の文人には科挙に対して批判的な者も多かった。三浦秀一『中国心学の稜線 元朝の知識人と儒道仏三教』（研文出版、二〇〇三年）中篇附論「元朝南人における科挙と朱子学」を参照。劉辰翁も、「科擧興、士能時文而止、而時文亦復猥陋不達」（『須渓集』巻六「曾季章家集序」）や「蓋進取之事不在科擧、而在學術與人品、此世道之古也」（同書巻一「臨江軍新喩県学重修大成殿記」）とあるように、宋末の科挙や、科挙の為の所謂「時文」に対しては批判的であった。

（21）劉辰翁『須渓集』巻六「陳生詩序」に「吾評古今甚深密義、得之淺易、它人不能識、乃反笑予」とある。

（22）『元史』世祖本紀に「（至元十二年【一二七五】九月）丙申、以玉昔帖木兒爲御史大夫。括江南諸郡書版及臨安祕書省『乾坤寶典』等書」（巻八）とある。この時に集められた書籍は、そのまま大都へと送られた可能性が高い。さらに「（至元十三年二月）伯顏就遣宋内侍王埜入宮、收宋國衮冕・圭璧・符璽及宮中圖籍・寶玩・車輅・輦乘・鹵簿・麾仗等物。……丁巳、命焦友直括宋祕書省禁書圖籍」（巻九）や、「（至元十五年四月）庚辰、以許衡言、遣使至杭州等處取在官書籍版刻至京師」（巻十）など、江南の書物を熱心に首都大都へと集める元朝の政策が窺える。これにより、宋滅亡直後の江南に、一時的な書物の不足が生じたことが推察される。戦火による散佚だけでなく、江南の書物が大都に集められたことも書物の「零落」の一因であろう。

（23）李賀詩への劉辰翁の評点は、呉正子箋注劉辰翁評点『李長吉歌詩』四巻外集一巻として伝存する（注釈者の呉正子は江西金谿の人。陸象山の妻呉氏の一族で、陸象山の甥にあたる）。この本は明刊本（劉須渓評点九種書本）・四庫全書本の他、京都大学蔵室町写本（京都大学電子図書館のホームページ上に貴重資料画像として写真が公開されている［http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/index.html］）・国立公文書館蔵江戸写本・昌平坂学問所刊官板など複数のテキストが存在する。これらの

うち最も備わるものは官板『唐李長吉歌詩』であり、本稿も官板を底本として適宜諸本を参照した。

（24）官板は「身」字の圏点を欠くが、諸本に拠り補った。

（25）後世の注釈によって、「懸腸草」は『述異記』に見えることが指摘されている。

（26）明版・江戸写本・官板は「孩提」の後に三字の空格がある。一方、室町写本には空格は無く、四庫全書本は「之泣亦」の三字を補っている（四庫全書本は「老夫採玉歌」の大部分を「原本殘缺」として欠いており、劉辰翁の評語の末尾と呉正子注のみを載せる）。四庫全書本に従っても意味は通るが、四庫全書本以前の全てのテキストにおいて「之泣亦」の三字が見られないため、ここでは底本に従い、空格のままとした。室町写本に空格が無い理由は未詳だが、この本には、逆に他本では空格にしない部分を空格にする例もあるなど（室町写本巻四「高軒過」など）、不明な点が多い。

（27）呉澄『呉文正公集』巻十一「大酉山白雲集序」。

（28）揭傒斯『揭文安公全集』（四部叢刊初編）巻八「呉清寧文集序」に「須溪作而江西爲之變。……須溪沒一十有七年（科挙が再開した一三一四年を指す）、學者復靡然棄哀怨、而趨和平、科舉之利誘之。……須溪衰世之作也、然其評詩、數百年之間一人而已。獨非子之師乎」とある。

（29）百衲本『金史』巻首に載せる至元五年（一三三九）九月某日付の命令文書を参照。また廬陵における出版の隆盛については土肥克己「宋元時代の建陽と廬陵における分集本出版」（『東方学』第一〇九輯、二〇〇五年一月）、同氏「楊朝英と楽府新編陽春白雪に介在する江西の文化背景」（神戸大学『未名』二三号、二〇〇五年）がある。

（30）元人による元代詩文の総集であり、至元二年（一三三六）に国家出版され、元代に広く読まれた蘇天爵『国朝文類』も劉辰翁の作品を載せており（巻八に劉辰翁「春晴」二首を収録）、彼の名声は必ずしも江南のみにとどまるものではなかったことがわかる（同じ宋末元初の人である文天祥や謝枋得、謝翱などの作品は載せない）。